



朝礼



川崎ゆきお

「力説してしまうとまずいですなあ」

定年後、まだ工場で働いている坂上が言う。最長老と言うほどの貫禄はない。平の工員のまま定年を迎えたのだ。ずっと二等兵のままだった。

その坂上は、最近朝礼で話すようになった。教訓めいたことを言えばいいだけだ。毎日ではなく、月曜日のみ。

その草案を一週間かけて作り、練習していた。役職に就けなかったのは病気がちのためで、長く入院し、休職していたことがある。一度ではない。

「力説するときは注意が必要なんだなあ」

それを聞いている鴨は部下ではない。後輩程度だ。この鴨も定年後、まだ来ている。いずれ坂上が辞めれば、月曜の朝礼の役が回ってくるはずだ。

「どういうことですか、坂上さん」

「力説というか、熱演しすぎると、嘘臭くなる。それと、感情が出てしまう。これがまずい。こういうときは個人的感情で話していることになる」

「お寺さんの説話のようなものでいいでしょ。兎と亀の話程度の」

「それは覚えられん」

「ああ、そうなんですか。簡単な話ですよ」

「君も、大勢の前で話せば分かるが、頭は真っ白になるんだ」

「因幡の白兎ですね」

「ああ、皮をむかれて赤肌かじゃないが、赤恥をかきそうになる」

「毎週聞いていますが、普通ですよ。しっかり話されているじゃないですか」

「教訓の本を書ってねえ。それを読んで自分のものにして喋るんだ。理解していないと、喋れないんだよ。暗記しても忘れる。真っ白になる。順番を間違える。だから、自分で消化した話でないと駄目なんだ」

「簡単に話していると思っていたのですが」

「一週間かかるねえ。そこまで詰めるのに」

「それを家で練習するのですか」

「ああ、声を出してね。録音もし、チェックもする」

「ああ、すごい努力です」

「まあ、適当に話せばいいって、言われているんだけど、そうもいかない」

「結婚式のスピーチ程度でしょ」

「まあ、そうなんだが、ネタを自分で探さないといけない。何も無いところからね」

「でも、教訓集とか、そういった虎の巻があるじゃないですか」

「うん、そうなんだ。自分じゃ話は作れないからね。しかし、台本はあっても実際に喋るとなると、これは別なんだ。台本を見ながら読むのならいいけどね」

「それで、力説がどうのって、何です」

「つい、感情移入してしまっってねえ。講演が講談調になるんだ。身が入っってしまっってねえ」

「身ですか」

「身か何か分からんが、気持ちが入ってしまうことがある。これが、もう、臭い臭い」

「ああ、はい」

「この臭いを消したい」

「消臭剤をつければ」

「それも考えたが、遠くまで届かんだろ」

「そうですねえ」

「なぜ臭くなるのかというと」

「何でしょう」

「だから、感情移入のし過ぎなんだ。そして、力んでしまう」

「はい」

「しかしねえ鴨君」

「はい」

「これが、気持ちよくて、気持ちよくてねえ」

「はあ」

「聞いている方は悪臭で大変だろうが」

「いえいえ、熱演されているなあと、感心しながら聞いていますよ」

「そうか」

「悪くないですよ」

「本当か」

「はい」

「いいのか、あれで」

「最近、間の取り方も凄いですよ。もの凄く引っ張るでしょ」

「ああ、あれはねえ、やりだすと病み付きになる。かなり間を空けるんだよ。まるで台詞を忘れたかのごとくね」

「本当にそうだと思いますよ、冷や冷やしましたよ」

「あれは、わざとなんだ」

「あ、はい。でも、頭の中真っ白になるって言ってませんでした」

「感情さえ乗れば、黒くなる」

「はあオセロですねえ」

「しかし、感情が入ると熱演してしまう。また入らないと、丸暗記では忘れてしまう。この調整が難しいよ」

「毎週毎週大変ですねえ。僕も出来るでしょうか」

「やり出すと、楽しくもあるねえ。今まで職場で注目されたことがあるかね。ないだろ。それが、一気にこの年で来るんだ。これは張り切るよ」

「はい、また、臭いの、お願いします」

「やはり、臭いんだ」

「あ」

了